

都市と田舎は、対等のパートナー。
 「田舎を助けてやろう」
 「都会の人に助けてもらおう」
 という発想は通らない。



●ゲスト／秋田県二ツ井町 町長
丸岡 一直さん

全国にその名をはせた、

「きみまち恋文コンテスト」

森 二ツ井町は、秋田杉の本場です。北に世界遺産の白神山地、南に林業秋田の代名詞である天然秋田杉の美林を持ち、米代川の水運を生かして長年「木の街」として栄えてきたという歴史を持っています。その林業がご縁で、私も、昭和62年に商工会が発行した地域ビジョン「川と木と心でよみがえれきみまちの里」の策定にも参加させていただいた思い出があります。以来、二ツ井町の推移を遠くから眺めていたわけですが、丸岡町長が就任して以来、町は目覚ましい勢いで変わってきました。今は、町長になって2期目、6年目に当たるわけですが、丸岡町長のいろいろな試みの中でも、まず伺

ホストから一言

「恋文大賞」という名前を聞かれたことがありだろう。これは、愛するだけかを送る「日本一心がこもった恋文・ラブレター」を選ぶというもので、受賞作は毎年単行本に収録されベストセラーとなっている。このイベントの仕掛け人が、秋田県北部に位置する人口わずか1万3000人の二ツ井町町長の丸岡さん。しゃれたセンスをしておられるが、それもそのはず、丸岡町長は長年地元新聞社に勤め、退職前は報道部長だったという根っからのジャーナリスト。町の未来を見つめる視線は広く深く、さらには複眼の持ち主でもあるのだ。

っておかねばならないのが「恋文大賞」ですね。

丸岡 町の外れに「きみまち阪」という古くからの公園があります。ここは、明治14年に明治天皇が東北巡幸の際、皇后の恋文が届いたとの伝説で有名です。「大宮の内にもありても暑き日をいかなる山か君は越ゆるむ」。遠い地を旅する天皇を思う皇后の心情があふれた手紙です。以来この地は「褒后阪」と呼ばれるようになり、現在の「きみまち阪」に至るわけです。エピソードとして伝わっているものですが、史実ではないのですが愛。以来、春夏秋冬、町民の憩いの場所として親しまれていっていますが、

二ツ井町

秋田県北部、十和田湖と男鹿半島のほぼ中間に位置する。町面積の8割が山林。北は、白神山地につながるブナ原生林、南に天然秋田杉の美林が。高さ58mの日本一高い杉の木がある。町の中心部にある県立自然公園「きみまち阪」にちなんだ「きみまち恋文全国コンテスト」、全国規模の「きみまち二ツ井マラソン」等で有名。人口1万3000人、高齢化比率29%強。平成10年には、近隣の鷹巣町にあきた北空港（大館能代空港）が完成し、首都圏との距離が縮まった。



丸岡町長が企画した「恋文大賞」は、二ツ井町を全国的に有名にした。毎年、1万通に近い恋文が送られてくる。写真は今年2月に行われた「きみまち恋文全国コンテスト」の表彰式。

残念ながら最近ではあまり顧みられなくなっていました。そんなとき、私が町長に就任したんですが、目標の一つとして、町の人々の気持ちを一つにする、という課題がありました。そのためには、何かのシンボルが必要ですね。それじゃあ、というわけで「恋文大賞」の企画を提案したというわけです。

森 なるほど。明治の初めから、きみまち阪は、町のシンボルだったんですね。それが今度は、町を一体化させる役割を担い、しかも全国的に有名にさせてしまった。

丸岡 でも、最初は町の人もコンテストには疑心暗鬼でした。私は、新聞屋の感覚で、これはいける、と確信していましたが、町の職員や議員の中には、恋文を集めたところで何になるのか？ という声も多かったようですね。私がやろうとしていることが、よく理解できなかったらしいですね。しかし最後には議会も、「町長が変わったことをやろうとしているのか

ら、見てやろうじゃないか」と予算を通してくれました。私の予想より、半年も早く決まったほどです。そうしてコンテストが始まったわけですが、平成6年の第1回の応募者は全国から7035通。

大賞は、「天国のあなたへ」という素晴らしい手紙でした。しかもNHK出版が単行本として発行してくれまして、これが20数万部のベストセラー。私たちが全く予想もしていなかったことが、次々と起こってしまったわけです。しかし私が何よりもうれしかったのは、町の人々が自分たちにプライドを持ち始めたということです。全国から評価が寄せられてきたから、自分たちでもやり方次第で何かができる、という自信がわいてきたんですね。

森 それで、役場職員の意識も次第に変わっていったんですね。それまでは、自分の仕事を大過なくこなしていればよかったのが、自分たちの町についてもっと知らねばならない、となってきた。それが、町の情報誌「GURURIふたつい・きみまち百科」の発行につながって

国はメニューを用意するだけ。判断するのは、あくまで自分たち。

森 続いて試みられたのが、「200人委員会」ですね。住民参加というポリシーを、少しずつ具体化していかれたわけですね。

丸岡 これは私の公約の一つとして、町民みんなで基本構想を作る、という狙いに基づいたものです。就任して2年目の

いくわけですね。これはまあ、実に立派な情報誌で、とても役場の職員だけで編集したとは思えないほど楽しく、しかも役に立つように編集されていますね。

丸岡 だれもが、住民参加という言葉の口になります。しかし、何をすれば住民参加になるのか、それが分からない。住民参加を実現するためには、なによりも行政に対する関心と信頼が必要ではないのか？ と、ところが、町の人々が自分たちの町のことを知らないし、職員も知らない。だったら、住民参加とは、町に関する情報を知ることから始まる、ということとでスタートしました。どこの町でも町史を発行しますが、あれはだれもは読めない（苦笑）。だから、みんなで読めて役に立つものがない。それで、町の百科事典を作ろうということになり、合併40周年事業の一環として編集され、町民全戸に配布されたわけです。

森 自然に関する情報、町内案内、歴史ガイド、うまいもの情報、イベント等、まさに情報誌ですね。よその町の人が読んでもおもしろい。

とき、行政に物言いたい人はだれでもいいから来てほしい、と呼び掛けたところ、330人も来てしまいました（笑）。最終的に330人全員に参加を求め、テーマ別、地域別に分けまして、一年間かけて原案を考えてもらいました。町はあらかじめ何も用意しない、とにかく何でもい

さすがニツ井町は秋田杉の本場。保護林の中には最大樹高58m（日本一）の木や、最大直径164cmの木など堂々とした天然杉2800本余りがそびえ立つ。



「秋田杉の里」ニツ井まつりは夏休みに開催される。秋田杉の巨木が会場を圧倒し、秋田杉を使った木工製品が販売される。



いから、ということでも始めたわけですね。森 議会からの反論はなかったですか？丸岡 一部ありました。しかし、最終的には議会を通さねばならないことでもあり、理解してもらうことができました。そうやって基本構想が生まれ、全戸に配布されたわけです。ただし、構想作りに参加することは、実質的に責任を持ってもらうことだから、何を言ってもいいけど、実際のときは主体的にやってほしいという方針もありました。しかし、行政の側、町民の側、互いの不慣れのためなかなか現実的に動き出せないのが実情というところです。ただ、これは200人委員会の結論でもあったんですが、全町に合併浄化槽の構想が実施に移されています。実は平成6年度の時点で、町に公共下水道がありませんでした。当時は建設省の補助をもらい、基本計画を作りましたが、そのまま実施すると200億円以上かかり、完成までに20年を要するという試算が出ました。それじゃあ、ほかに方法はないのか？ というこ

とて全町に合併浄化槽の構想が決まり、現在、取り組みを進めているところですね。森 ほう。それだと費用は、かなり安く済むんですか？

丸岡 下水道の3分の1くらいですね。最近では下水道の評判が悪くて、浄化槽が注目されていますから、町の選択としては間違っていないかと思っています。現在の普及率は15%ほどですが、下水道より早く完了させたいと思っています。森 国がある枠を与え、その枠の中で地元の人たちが自分の足に合う靴を作るというのが本筋なのに、多くの首長さんたちは、国に従うことだけで汲々としておられる。しかし、ニツ井町はしっかりと自分たちに合う靴を作り続けている、という感じですね。

選択の時代の今、

われわれは胸を張って選択されたい。

森 さらに丸岡町長の視点は、環境問題という大きな視点での町づくり、という次元にまで到達しておられる。そのあたりのお話を伺いましょう。まず「森の学校」がございませぬ。

丸岡 これは平成8年からスタートしております。私どもの町は、天然秋田杉で知られていますが、東京に本部を置く環境団体「日本リサイクル運動市民の会」と町が共同で計画し、春夏秋冬、季節ご



「きままる」ニツ井マラソンもまた全国に知られている。各地から参加したアスリートがニツ井町の道を走り抜ける。

とに二泊三日、都会の人々が泊まりがけで森の勉強のためにやってくるという試みから始まりました。都会の人は自然を大事にしようと呼ぶけれども、私たちは林業で生活していかなければなりません。だからこそ、観念でなく実際に肌で自然に接してほしい。そして、一緒に何ができるかを考えようというもので、正確には「森で遊び林業を考える学校」というものです。



丸岡一直 (まるおか かずなお)

昭和26年、秋田県山本郡二ツ井町生まれ。県立能代高校卒。早稲田大学政経学部卒。北羽新報社入社。報道部次長等を経て、平成5年の退職時は、報道部長。平成6年8月、二ツ井町長就任。現在は2期目。山本郡阿村会会長、秋田県町村会総務委員、秋田県社会福祉協議会評議員等を歴任。

東京ふるさと会二ツ井町の特産品をPRする丸岡町長。



森 都市の人間と地方の人間が、手をとり合おうということですね。

丸岡 都市が行き詰まっているのは確かです。だとしたら、われわれ田舎の人間こそが都会を救えるかもしれない。もう、田舎を助けてやろう、都会の人に助けてもらおう、という発想の時代ではないんです。都会と田舎は、対等のパートナーでなければなりません。これからは、選択の時代です。われわれは胸を張って選択される側になりたいと思っています。

森 そうした試みの一環として、新たに「自転車の町づくり」を始めるとか？

丸岡 はい。きっかけは、放置自転車の多さですね。とにかく、もったいない、何とかならないかということで、放置自転車をたくさんもらってきて、町の中にたくさん自転車置き場を作ろうじやないか、というものです。その自転車はだれが乗ってもいいし、行きたいところまで乗ってその自転車置き場に置いておけばいい。歩きたくなったら、別の自転車乗り場から別の自転車に乗る。町全体に30〜40カ所の自転車置き場を作りたいと思っています。そうすれば放置自転車の問題も解決するのではないかと。それに、田舎も、もはや車社会なんです。自然を売り物にしているとはいえない。車ばかり使っているのは何も自然の恩恵を受けていることにはならない。自分たちも車に乗るのは少なくなつたほうがいい。それに、「恋愛」で町を訪れてくれる人も増えています。大して広い町ではありませんから、そんな人たちに自転車を利用してもらえば、町を肌で感じてもらうこと

もできるでしょう。車は会話をさせない乗り物ですが、自転車ならすぐに立ち止まって住民との会話も可能です。さらには、古い商店街に人を呼ぶ方法になるかもしれません。

森 なるほど。自転車でノンビリ走り、山や川をゆっくり眺め、地元の人と立ち話をします。それこそが本物の観光ですね。

丸岡 自転車が仮にうまくいったとしたら、次は道路が変わる、という話になるはずですね。いまの道は車のための道であって、自転車には不自由きわまりない。ましてや歩く人、車いすの人のことなんて、何一つ考えていない。そんなことも見直すきっかけになるんじゃないでしょうか。これは、道だけの問題ではありません。行政も車と同じで、特化した側面が見られます。ですから、こうした運動を通じて行政のあり方自体を見直すきっかけになればいい、とも思っています。

森 こうした試みは、「速いこと、大きいこと、新しいこと、はすべていい」という今までの日本の価値観に対する大きな批判ですね。土の上を下駄で歩ける道のほうが、本当の道かもしれませんね。そこは通学路にもなるし、道草の場所にもなる。

丸岡 歩道がない道が、全国に半分以上あるといわれます。

森 自転車の問題からでも、行政のあるべき基本、教育、さらには文化の問題までが見えてくる。丸岡さんは、まさにアリー・アダプター。変化の先取りをしている人ですね。そんな丸岡さんでも、やはり、町長という仕事は難しいもので

すか？

丸岡 難しいですね(笑)。ただ私は、こう自分に言い聞かせています。私は元々新聞記者です。ただし田舎の小さな新聞社でしたから、全国紙のように文句を書きっぱなしにするわけにはいきません。

狭い地域で活動していますから、今日だれかの文句を書いても、明日、本人に合わねばならないかもしれない。だったら、しっかりと批判を書こう。本人の前で堂々と口でできるような批判を書こう、と自分自身に言い聞かせてきました。もちろん、そのためには勉強が欠かせないことは言うまでもありません。

森 丸岡さんとお話している町長長のタイプも随分変わってきたという印象を受けます。ジャーナリスト精神を失わず頑張っていたんだと思います。本日はどうもありがとうございました。



●ホスト後記

昭和22年、国が発行した初の国民白書「経済白書」の冒頭にこうある。「古来、国家の盛衰盛んなるところは、森林の象徴と

共に……」今やわが国の森林は経済大国の出現と反比例するように滅亡の危機に瀕している。そして林業の町の町長である丸岡さんは語る。「山が衰え、山が衰えつつある」と。しかし、今、みんなが気が付けば間に合う、とも丸岡さんは語っている。小さな町からの大きな視点、危機を見据えながらも決して慌てることのない腰を据え取り組み。それは、もつとひとくくなくとも自分たち町舎の人間は生きていける、という大地に根差した人ならではの発想と書えるだろう。